第１回関学速研の歴史レポート

2021年2月7日
桑原みなみ

●速記研究部創立50周年記念『古い顔』（平成19年11月3日発行）編集・発行：関西学院大学速記研究部OB有志会

★あゆみ（P8より）

昭和33（1958）年11月29日、「速記研究会」が同好会として発足。約70人が集まる。11月29日12時半、中央講堂東広場にて会員を募る。13時、商学部C5教室にて創設の挨拶。速記についての概説を行った後、初練習をする。高橋、三崎が指導担当となり、基本文字のア行からサ行まで行う。出席者は60余名、14時解散。

翌12月1日、練習教室の部屋割り、商学部事務長へ申請、許可を得る。練習のための用紙を購入し、入会金及び部費として200円を徴収。チャペルアワー（1限と2限の間に存在する礼拝のための休み時間）時の練習に40余名参加、基本文字タ行からナ行までを行い、昼食時の練習に同じく40余名が参加、基本文字ハ行からマ行までを行う。

12月2日、正式に会の役員が選出される。会長は経済部1年の三崎日出男、副会長に商学部1年の高橋立成、会計に商学部1年の平山雅彦、顧問に商学部教授の島谷照夫が就任する。この日のチャペルアワーと昼食時の練習で基本文字全部と半濁音まで完了する。

12月3日、名簿を作成する。申込者は合計60名、うち会費支払い者は40名。撥音「ン」を除基本文字が完了したので、官報で文章を読んで練習する。日速式（日速研式と思われる）をやっている文学部2年の板崎君から手紙が来る。彼らも速記部を作ろうと思っていたが、こちらが先に作った。それについて12月5日昼食時、図書館で話し合うことになる。どうしても新たに同好会を作りたいという。彼らの先生が無料で学校へ来てくれるという。この日の晩、中根式の兵庫県支部長である稲垣正興に聞いたところ、日速研式はまだ日本速記協会でも認めておらず、日速研式の創始者も速記士会には加盟しておらず、もめているところだと聞く。

12月10日、中根式兵庫県支部長・朝日新聞記者の稲垣正興氏が来演。速記の重要性について再認識する。“日速”なんかに負けない部にしてみせるぞ（注）日速研式の話はその後、立ち消えとなる。

→関学には日速研式の部を作る構想があったことが分かる。

12月20日、年内の練習を終える。チャペル時の練習参加者は11名。会員は51名＋3名（会費未支払いか？）とのこと。

昭和34（1959）年7月、千刈キャンプサイトでの合宿を開始。この合宿は速記の実力向上と親睦を深める目的だが、現在毎年7月頃に行われている新歓合宿（確定新歓）の祖先に当たるものか？

昭和37（1962）年8月、クラブ誌『POPLAR』創刊号発行（現在は廃刊）。

昭和38（1963）年4月、文化総部傘下の「クラブ」に昇格。「速記研究クラブ」になる

昭和39（1964）年10月16日、部室が完成する。

昭和41（1966）年4月1日、文化総部の「部」に昇格。「速記研究部」となる。

※ここに記載されているような創立時のものかは不明だが、部室の棚の中に過去の部長のノートや部員名簿等が存在するので、部室に入室可能になれば、そちらも一度整理して作成したい。

★活動内容など

活動の中でも、速記に関係するものを主に挙げていく。

現在の練習時間としては、基本的に練習は平日の５限に毎日行われ、それぞれ時間割が空いている者が参加する。週２回と言われてはいるが、参加日数については厳しく決められてはいない。また、５限に空きのない者に対しては、別の空き時間に練習の対応をすることもある。また、年３回の大会と、それに備えた強化練習がある。強化練習の長さは、関西学生速記競技大会の前は１週間、新人戦の前は２週間、全日本大会の前には３週間あり、長期休暇の期間にも執行部が随時協議し、１週間から２週間程度の強化練習が開催される。

役職としては以下のとおり。部の責任者となる部長、広報や雑務、部長の補佐を担当する副部長、速記指導をまとめる指導部長、出納管理の会計、イベントの企画を行うマネジャー、学生速記連盟の中の大学代表となり他校との連携を取る支部会、理事長職などが存在する。

教程の進め方としてはプリント形式で、１課に大体１枚のプリントが各個人に上級生の指導部より渡される。学習者の判断で先に進められることはなく、必ず習熟度に応じてプリントが上級生により渡される仕組みとなっているため、個人によって省略の学習進度が異なる。

過去には全員が同じ進度でスクーリングのような形式で練習が行われていた。１限と２限の間の礼拝の時間であるチャペルアワーと２限と３限の間の昼休みにも絶対参加の練習時間があった。速記部の数と部員が減った影響で練習絶対参加の制度はなくなり、同様に休み時間の練習もなくなった。

現在では行われていないが、過去には大学周辺の高校や部員の母校の速記部へ指導に行くことがよくあり、かなり厳しい指導をしていたようである。

部員数が多かった時代は、一定の時期で習熟度により読み手と書き手に部員が役割を決められ、練習時も大会運営なども徹底してそれぞれの役割を果たしていた。

★全日での大会成績

現在の全日本大会は、毎年 11 月か 12 月の週末に年に一度の頻度で開催されている。平成 24 年までは５月頃に春の全日本大会が開催されていたが、平成 25 年度より年一回となった。

大会の形式としては、第１問テーマ「時事」と第２問テーマ「文芸」と２種類の文章がまず用意される。A 級分速 280 字、B 級分速 260 字、C 級分速 230 字、D 級分速 200 字、E 級分速 170 字、F 級分速 140 字で５分間読まれる文章を速記文字で記し、それを国字による元の文章に戻す正確度で競われる。問題ごとに順位が付けられ、A 級１位には 100 ポイント、２位には 95 ポイントといった要領で点数を各大学で合計し、上位５人の合計点で総合順位が決められる。

以下、過去の関西学院大学の全日本大会での大会成績を列挙していく。

関西学院大学文化総部速記研究部は、同好会結成から３年の昭和 36 年 12 月３日、第２回大会で初のオブザーバー参加にして総合優勝する。参加校は関西大学、同志社大学、早稲

田大学、日本女子大学、関西学院大学の５校。

昭和 37 年５月 27 日開催の第３回大会では１位同志社大学、２位早稲田大学、３位関西学院大学、４位関西大学、５位日本女子大学となる。関学はＡ級１位、Ｂ級３位、Ｃ級４位であった。

昭和 37 年 12 月９日の第４回大会では、A、B、C 級で１位を取り初の完全優勝を果たした。１位関西学院大学、２位同志社大学、３位関西大学、４位早稲田大学、５位日本女子大学となった。

昭和 38 年５月 19 日の第５回大会では、Ａ級１位、Ｂ級１位、Ｃ級２位で２期連続総合優勝を果たした。総合成績は１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位同志社大学、５位日本女子大学、６位が初参加の中央大学。

昭和 38 年 12 月８日の第６回大会では、Ａ級２位、Ｂ級３位、Ｃ級１位で３期連続総合優勝となる。総合成績は、１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位同志社大学、５位日本女子大学、６位中央大学。

昭和 39 年５月 24 日開催の第７回大会では、A、B、C 級でそれぞれ１位を取る完全優勝を果たす。総合成績は、１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位同志社大学、５位日本女子大学、６位中央大学。

昭和 39 年 12 月 13 日開催の第８回大会では、採点不統一により記録そのものが無効となった。そのため、結果は残っていないが、『POPLAR』６号には詳細が記されているという。この第８回大会で学習院大学が初参加を果たす。

昭和 40 年５月 23 日の第９回大会では、Ａ級３位、Ｂ級１位、Ｃ級１位で５連覇を達成する。総合成績は、１位関西学院大学、２位早稲田大学、３位関西大学、４位中央大学、５位日本女子大学、６位同志社大学、７位学習院大学。大阪経済大学はこの回でオブザーバー参加となる。

昭和 40 年 12 月 19 日の第 10 回大会で連覇が破られる。総合成績は１位早稲田大学、２位関西学院大学、３位中央大学、４位関西大学、５位日本女子大学、６位同志社大学、７位大阪経済大学、８位学習院大学。オブザーバー参加には大阪大学と京都府立大学が参加した。

昭和 41 年５月 22 日の第 11 回大会では総合優勝に返り咲きする。総合成績は、１位関西学院大学、２位早稲田大学、３位関西大学、４位中央大学、５位同志社大学、６位日本女子大学、７位大阪経済大学、８位学習院大学となる。この回もオブザーバーは大阪大学と京都府立大学であった。

昭和 41 年 12 月 11 日の第 12 回大会では、当初開催予定地だった中央大学が学生運動の全学ストのため、急遽早稲田大学で開催となった。総合成績は１位関西学院大学、２位中央大学、３位関西大学、４位早稲田大学、５位同志社大学、６位日本女子大学、７位大阪経済大学、８位学習院大学であった。

昭和 42 年５月 21 日の第 13 回大会では、６大会ぶりの完全優勝を果たす。総合成績は、１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位中央大学、５位同志社大学、６位大阪経済大学、７位日本女子大学、８位学習院大学。オブザーバーは愛知工業大学であった。

昭和 42 年 12 月（日付不明）の第 14 回大会では、総合成績１位早稲田大学、２位関西大学、３位関西学院大学、４位中央大学、５位同志社大学、６位日本女子大学、７位大阪経済大学、８位学習院大学であった。

昭和43年5月26日の第15回大会では、総合成績1位関西大学、2位関西学院大学、3位早稲田大学、4位同志社大学、5位中央大学、6位大阪経済大学、7位日本女子大学、8位学習院大学であった。ここから関西大学連覇の時代が始まったとみられる。

昭和43年12月8日開催の第16回大会では、総合成績1位関西大学、2位早稲田大学、3位関西学院大学、4位中央大学、5位同志社大学、6位大阪経済大学、7位日本女子大学、8位愛知大学、9位学習院大学となり、そのほかにも京都府立大学が参加していた。会場は早稲田大学であった。この第16回大会では加盟校10校とオブザーバー1校が参加し、過去最多参加校数となった。

昭和44年12月7日の第17回大会では、関学は大学紛争のため不参加となった。総合成績は1部で1位関西大学、2位早稲田大学、3位同志社大学となった。2部では1位大阪経済大学、2位日本女子大学、3位同志社大学となった。会場は学習院大学であった。1部、2部の別は要調査。

昭和40年頃より大学紛争が盛んになり、速記部の活動自体に影響を及ぼしている様子が読み取れる。この昭和43年の第16回大会をピークに廃部が増えた。

（昭和45年から平成18年5月の大会まで不明）

平成18年12月の第92回大会ではB級4位、C級1・2位で、関西学院大学は総合成績3位となった。会場は早稲田大学だった。

平成19年5月27日の第93回大会では、B級5位、C級2位、E級1・2位、F級1・2・3位で総合成績1位関西大学、関西学院大学は2位となる。会場は関西大学だった。

（平成20年のみ不明）

平成21年春の全日本大会は、新型インフルエンザ流行のため中止となった。

平成21年12月6日開催の第97回大会では、B級1位、D級2位、E級2・3位、F級2位で、総合成績1位関西大学、2位関西学院大学、3位早稲田大学、4位福岡大学だった。会場は国立オリンピック記念青少年総合センターだった。

平成22年5月30日開催の第98回大会では、C級3位で総合成績1位関西大学、2位早稲田大学、3位関西学院大学となった。会場は関西大学だった。

平成22年12月5日開催の第99回大会では、B級1位、E級2・3位、F級1・2・3位で、総合成績は1位関西大学、2位早稲田大学、3位関西学院大学、4位福岡大学だった。会場は早稲田大学だった。

平成23年6月19日開催の第100回大会では、D級1位、F級1・2位で、総合成績は1位関西大学、2位関西学院大学、3位早稲田大学であった。会場は関西大学だった。

平成23年12月開催の第101回大会では、C級2位、D級3位、F級2位で、総合成績は1位関西大学、2位関西学院大学、3位早稲田大学となった。

平成24年5月27日開催の第102回大会では、A級2・3位、E級2位、F級1・2位で、総合成績1位関西大学、2位関西学院大学、3位早稲田大学となった。主催は関西大学であった。

平成24年12月8日開催の第103回大会では、A級1・2位、E級1・2位で、総合成

績１位関西大学、２位関西学院大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。

平成25年からは毎年春に開催されていた春の全日がなくなり、全日本大会は年に一度の大会となった。10月の第104回大会では、Ａ級１位、Ｅ級２・３位で総合成績１位関西大学、２位関西学院大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。

平成26年11月22日開催の第105回大会では、Ａ級１・２位、Ｂ級３位、Ｄ級２位、Ｅ級１位、Ｆ級３位で総合成績１位関西大学、２位関西学院大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。主催は早稲田大学で、総合１位関西大学と２位関西学院大学との差は10ポイントであった。

平成27年の第106回大会ではＡ級２・３位、Ｂ級１位、Ｃ級２位、Ｄ級３位、Ｅ級１・３位、Ｆ級１・２・３位で、総合成績は１位関西大学、２位関西学院大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。主催は関西大学で、総合１位関西大学と２位関西学院大学との差は前回同様10ポイントであった。

平成28年12月10日の第107回大会ではＡ級１・２位、Ｃ級１・２・３位、Ｄ級１・２位、Ｅ級１・２・３位、Ｆ級１・２・３位と、関西学院大学からはエントリーのなかったＢ級以外の全ての級で優勝した。この結果、全日52連覇の関西大学を破り、総合優勝を果たした。総合成績は１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。主催は関西学院大学。

平成29年12月16日の第108回大会では、Ａ級１位、Ｂ級１・３位、Ｃ級３位、Ｄ級１・２位、Ｅ級３位、Ｆ級２・３位で総合優勝を果たした。主催は早稲田大学で、総合成績は１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位福岡大学だったが、総合１位関西学院大学と総合２位関西大学との差は10ポイントであった。

平成30年12月８日の第109回大会では、Ａ級１位、Ｂ級１位、Ｄ級１・３位、Ｅ級１・３位、Ｆ級３位となり、総合成績１位早稲田大学、２位関西学院大学、３位関西大学、４位福岡大学となった。

令和元年12月第110回大会では、Ｂ級１位、Ｃ級２位、Ｄ級１位、Ｅ級１・２・３位、Ｆ級２位と、Ｅ級では上位を独占し総合優勝を果たした。総合成績は、１位関西学院大学、２位早稲田大学、３位関西大学、４位福岡大学であった。

令和２年11月の第111回大会ではＡ級２・３位、Ｄ級１位、Ｆ級１位、Ｉ級１・２位で総合優勝となった。新型コロナウイルス感染症対策のため完全オンラインで開催され、また部活動自体が年度初めから開催できていないこともあり、下級をＩ級（60字）まで増やして開催した。主催は早稲田大学で、総合成績は１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。

★「新人戦」について

全日本大学速記競技大会のほかにも速記歴２年未満の者のみが出場できる「全国学生新人速記競技大会」が存在する。過去には、関西の大学のみでの新人戦と関東の大学のみの新人戦とが存在したようだが、平成25年に「全国学生新人速記競技大会」に名称が変更、全国の速記部４校がそろう大会となった。また、早稲田大学邦文速記研究会と関西学院大学速記研究部とで持ち回りで開催するようになった。

大会の内容としては、全日本大会と同様に第１問「時事」、第２問「文芸」とテーマの異なる文章をＡ級分速260字、Ｂ級分速230字、Ｃ級分速200字、Ｄ級分速170字、Ｅ級

分速 140 字、F 級分速 120 字、G 級分速 100 字を各３分ずつ朗読されたものを速記文字で記す。それを反訳して元の国字による文章に戻し、正確度を争うものである。新人戦は、階級ごとのポイントが階段状に与えられる全日本大会と異なり、各階級の１位に一律５ポイント、２位に４ポイント、３位に３ポイントが与えられ、総合成績は各大学のポイント数の合計によって決まる。

全国大会になってからの大会結果としては、平成 25 年 11 月 24 日開催の第１回全国学生新人速記競技大会では、A 級１位、C 級１位、D 級１位、E 級１・３位（１位同率）、F 級１・２・３位、G 級１・２・３位だった。関西学院大学からエントリーのなかった B 級以外で優勝を独占し、総合成績は１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。

平成 26 年 10 月 12 日開催の第２回大会では、A 級１・２位、B 級１位（ほかエントリーなし）、C 級２・３位、D 級１・２・３位、E 級１・２・３位、F 級１・２・３位、G 級１・２・３位で総合優勝を果たした。総合成績は、１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。

平成 27 年 10 月４日開催の第３回大会では、A 級１・２位、C 級２・３位、E 級１・３位、F 級１・２・３位、G 級１・３位で総合１位関西学院大学、２位関西大学、３位早稲田大学、４位福岡大学となった。

平成 28 年 10 月 16 日開催の第４回大会では、A 級１位、B 級１位、D 級２・３位、E 級３位、F 級１・３位（１位同率）で、総合成績１位関西学院大学・早稲田大学同率、３位関西大学、４位福岡大学だった。

平成 29 年 10 月 29 日開催の第５回大会では、A 級１位、C 級１位、D 級３位、E 級３位、F 級１位で、総合１位早稲田大学、２位関西学院大学、３位関西大学、４位福岡大学となった。会場は関西学院大学だった。

平成 30 年 10 月開催の第６回大会では、A 級２位、B 級２位、C 級１位、E 級１・２位、G 級１位で、総合１位早稲田大学、２位関西学院大学、３位関西大学、４位福岡大学となった。

令和元年 10 月 26 日開催の第７回大会では、A 級１位、C 級２位、D 級１位、F 級１・３位、G 級２・３位で、総合１位早稲田大学、２位関西学院大学、３位福岡大学となった。会場は早稲田大学だった。

令和２年 10 月 11 日の第８回大会は、新型コロナウイルス感染症の影響で、全日本大会と同じく完全オンラインで下級が J 級（分速 40 字）まで追加され、関西学院大学主催で開催された。個人成績は A 級１位、E 級１・３位、J 級１位（同率１位）で、総合成績は１位福岡大学、２位早稲田大学、３位関西学院大学、４位関西大学となり、福岡大学が初優勝を飾った。

★関西学生速記競技大会について

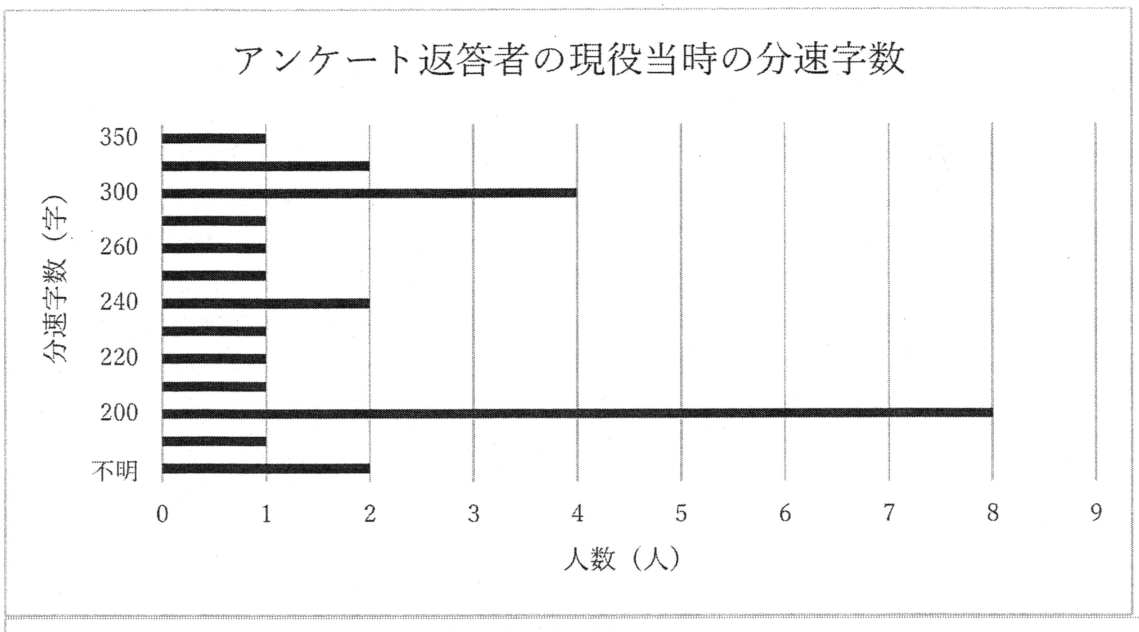
関西学生速記競技大会とは、関西大学速記部が主催となり、毎年６月の「関関戦」の時期に行われる関西大学速記部と関西学院大学速記研究部内の大会のことである。大会の内容としては、１級分速 280 字、２級分速 240 字、３級分速 200 字、４級分速 160 字、５級分速 140 字、６級分速 100 字、７級分速 60 字、８級分速 40 字を３分朗読されたものを速記文字で書き記し、反訳でそれを国字による元の文章に直したものの正確度を争うもの

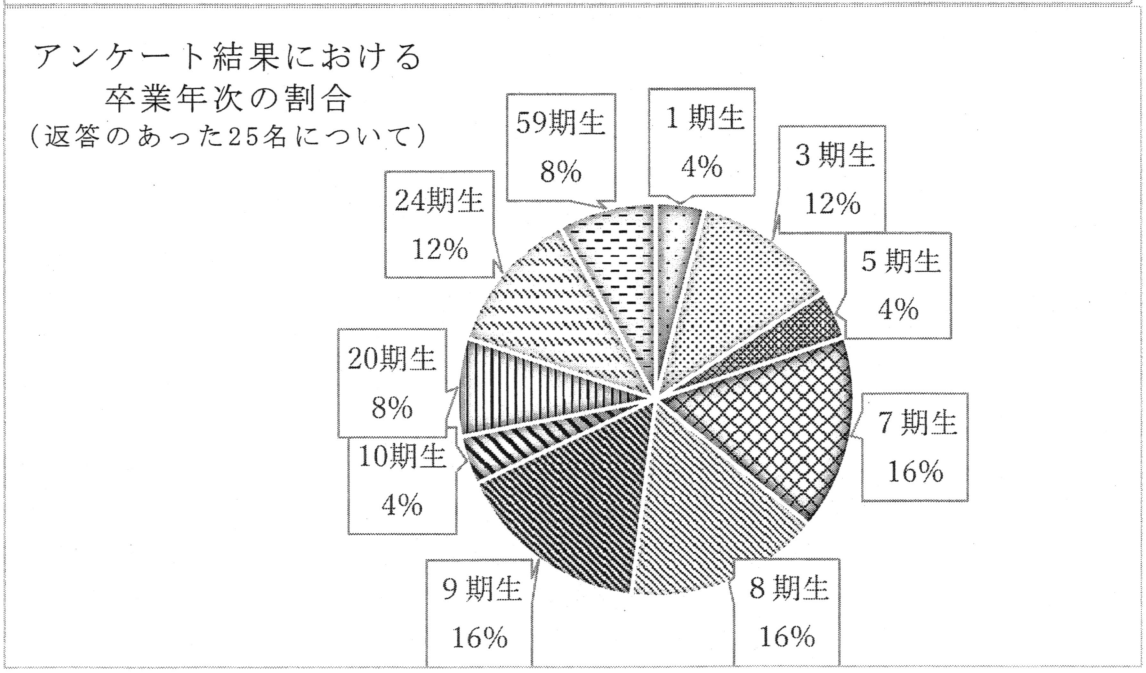
である。この大会には厳密に入賞のためのミス率が規定されており、５％未満でないと入賞ができず、ミス０賞も用意されている。また、１年生が入部して初めて参加する速記競技大会になるので、１年生が出場する７級（分速 60 字）と８級（分速 40 字）は用字例によるミスを取らないことになっている。あくまで下級生が主という性質の大会であるので、例年この大会での総合成績は出されていない。

★令和元年度の OB 会で実施したアンケート調査結果（当時習得した速記技能、現在でも速記文字を書けるか、どんな符号か、それぞれが思う速記の有意性など）：PDF 参照

・アンケート属性

OB 会参加者（2019 年７月７日開催）。１期生から 59 期生 37 名参加、うち返答あり 25 名の現役当時の字数と卒業年次の割合は以下のとおり。





・速記について思うこと（自由回答）

ことばの理解力、文章を構成する力になる。（1期生、300字）

速記は人生で大変役に立ちました。ただし、書くという事でなく人との会話を確実に聞き、理解するということ事で、仕事にも役立ち、人との会話の楽しみもふえたと思います。（3期生、250字）

1つも上達しませんでした。センスの問題と思います。特に反訳が大変でした。（3期生、200字）

集中力。（7期生、200字）

こんな便利なもの、もっと習う人がふえてほしいと思います。（7期生、300字）

今後も続いてほしい。（8期生、350字）

AIの時代によく続いていると思う。（8期生、字数不明）

時代の流れを考えれば、こんなに大学クラブ活動が続くとは思っていなかった。（8期生、300字）

聞く耳を持つ事、社会人になって大変役立った。（9期生、230字）

人より速く人の話を書けるので人より情報量を多く取り入れることができる。人生が豊かになると思います。（9期生、280字）

社会に出ていろいろ役に立ちます。（10期生、200字）

高校時代に通信制で早稲田式をしていた（大学時は中根式に転向）。速記を通じて、様々な文章を聞き、書き、読みして、そのことが自分が文章（論文等）を書く時の基礎力になっています。今でも速記の省略を生かして（け→経済など）PCの中に単語登録し、文を速く書くのに活用しています。（20期生、210字）

貴重な文化であり、技術です。（24期生、260字）

部活を楽しんでいました。書けなかったことが苦しかったです。（24期生、180字）

脳トレになりそう。（59期生、200字）

思っている、外から見えるよりも習得しやすいと思います。速記人口自体が少なくて速記を盛り上げようという動きがあまりなくて寂しいなとちょっと思います。（59期生、240字）

★先輩に対するインタビュー（メールにて）

★『古い顔』より追記

★教則プリントについて（基本文字の変化がある）

出典：関西学院大学文化総部速記研究部ホームページ
http://kwanseisokki.blog.shinobi.jp/（2021年2月5日閲覧）
関西大学1部文化会速記部ホームページ
http://ksokki.web.fc2.com/（2021年2月6日閲覧）
速記研究創立50周年記念『古い顔』（関西学院大学速記研究部OB有志会編集・発行）（平成19年11月3日発行）